

笑い声の聞きとりにおける文化差  
日本人とイタリア人の場合

郡 史 郎  
大阪外国語大学

要旨

笑い声の文化差について考察した。楽しい時の笑い声や滑稽な時の笑い声のように、情緒性の強い笑い声は文化的普遍性が大きく、人をバカにした笑いや勝ち誇った笑いのように、対人交渉の場で現われ、社会性の強い笑い声は文化差が大きいという仮説をたて、これを日本人とイタリア人を対象とした聴取実験の結果に基づいて検討した。聴取実験はひとりの日本人の17種の笑い声(うち1種は笑いの意図のない対照音声)が、笑いのタイプを表わす7種のラベルの名々にあてはまるかどうかを3段階で評価させた。その結果、「楽しそうな」と「滑稽な」という情緒性の強い笑いのラベルに対する評価では日本人とイタリア人の反応パタンの相関が高く、一方「誰かをバカにした」、「冷やかな」、「勝ち誇った」、「不敵な」という対人関係に関わる社会性の強い笑いのラベルに対しては両者の反応パタンの相関は低いという結果が得られた。この結果は仮説を支持するものである。また、「にが笑い」に対する反応パタンの相関も低く、日本とイタリアで笑いかたが異なることが推測される。自然な笑いかどうかという設問に対しては、両者は似た反応を示した。

Cross-Cultural Factors in the Auditory Judgment of Laughter:  
The Japanese and The Italians

Shiro KORI  
Osaka University of Foreign Studies

Abstract

Cross-cultural differences in the oral expression of laughter were studied by means of a listening test. The test examined the hypothesis that laughter of an emotional nature would have a universal way of expression, but laughter of a social nature would be culture-specific. The subjects (10 Japanese and 12 Italians) listened to 17 tokens of laughter by a Japanese male and judged their appropriateness for seven different categories of laughter. Both the Japanese and the Italian subjects similarly judged the appropriateness of the tokens to the "happy laughter" and to the laughter for a "comical situation" which are of emotional nature, thus indicating the similarity of their expression in the two cultures. For "derisive laughter," "indifferent laughter," "triumphant laughter" and "impudent laughter" which are of social nature, the groups showed a lower correlation of judgment, thus indicating their cultural specificity and supporting the hypothesis.

1. はじめに

「笑い」は、滑稽なことやおもしろいことを見たり聞いたり考えたりした時に現われる他、話し相手との心理関係を調節しようとする際にも現われる。また笑いは一面では生理現象であり、感情表出であり、一面ではコミュニケーションの一形態である。

人々は、様々な理由で、様々な風に笑う。我々は人の笑い声を聞いて、なぜ笑っているのかをある程度判断することができる。このような笑いの音声的表出とその知覚という現象を考えてみても、コミュニケーションとしての社会心理的アプローチと、音響音声学的および生理音声学的アプローチが考えられ、いずれの分野にも貢献するところが大きいと思われる。にもかかわらず組織的な研究の対象にはあまりならないようである。笑いやユーモアに関する科学的研究が進んでいない理由として、松山・浜(1974:135)は、「人が本気で研究するにはあまりにもわかりにくく、またとるに足らないことのように見える」という意識上の問題と、「分析に対する科学的研究方法がみづかりにくい」ことをあげている。

筆者は笑い声をコミュニケーションの一形態にとらえ、日本人の笑い声を材料として、その表現内容や表現効果(何を、なぜ笑っているか、どんな印象を与えるか)と、表現形式(どんな声で笑っているか)の対応関係を、聴取実験と音響分析を通じて探ろうとしたことがある(郡(1985))。

2. 笑い声の音響的特性、およびその知覚特性との対応づけの試み(郡(1985))

2. 1.

郡(1985)では、日本人男性1名が様々なタイプの笑いを思いうかべつつ「ハ」音で16種の笑い声を発した(「ハ」を1~7回繰り返す)。そのなかには、「ホ」に近い音もあれば、「ヘ」に近い音もあった。この16種の笑い声サンプルの他に、対照のために同じ発音者が単に「ハハハハハ」の音読した音声を加え、合計17サンプルの音声を材料として、音響分析と聴取実験を行なった。

聴取実験は、17サンプルの音声が、笑い声の研究材料として適当であるかどうかを検討し、それらが笑い声としていかなる表現内容や表現効果を持っていると聞かれるかを知るとともに、発音者の笑いの意図が音声を通じてうまく聴取者に伝わるかどうかをテストすることを目的として行った。郡(1985)ではその結果を音響分析の結果と対比して、両者の関係を考察した。

聴取実験の方法は、同じ音声を何回も(50回以上)繰り返し録音したカセットテープを1音声につき1本、合計17本準備し、これを10名の日本人被験者が必要なだけの時間聴取しながら、Tab. 1に示す質問紙を使って最大15の設問に答えた。15の設問とは、まず各々の音声サンプルが、(1)笑い声に聞こえるか否かを問う、さらに、(2)では笑い声だとすればどのような笑い方に聞こえるかを自由に記述させ、(3)では自然にこみあげた笑いか、それとも作った笑いかを判断させる。次いで、(4)以下では笑いの動機や笑い声の様態を表現するラベルをあらかじめ12種選び、当該音声は各々のラベルにあてはまるかどうかを3段階(非常にそれらしく聞こえる、少しそれらしく聞こえる、全然それらしく

テープ番号                     

今聞こえている声は

( 1 ) 実際にありそうな笑い声に聞こえますか。

聞こえる

聞こえない

もし実際にありそうに聞こえたら、次の質問に答えてください。  
実際にありそうに聞こえなかったら、次のテープに移ってください。

( 2 ) どんな笑いに聞こえますか。 思ったとおりに書いてください。

( 3 ) 自然にこみあげた笑いに聞こえますか。  
それとも作った笑いに聞こえますか (いずれかに○をつける)。

自然な笑い

作った笑い

( 4 ) 楽しそうな笑いに聞こえますか。

非常に  
それらしく  
聞こえる

少し  
それらしく  
聞こえる

全然  
それらしく  
聞こえない

( 5 ) 滑稽なことを見たり聞いたりして笑っているように聞こえますか。

非常に

少し

全然

( 6 ) 誰かをバカにした笑いに聞こえますか。

非常に

少し

全然

( 7 ) あいそ笑いに聞こえますか。

非常に

少し

全然

( 8 ) 勝ち誇った笑いに聞こえますか。

非常に

少し

全然

( 9 ) 豪快な笑いに聞こえますか。

非常に

少し

全然

( 10 ) 卑わいな笑いに聞こえますか。

非常に

少し

全然

( 11 ) 照れかくしの笑いに聞こえますか。

非常に

少し

全然

( 12 ) 卑屈な笑いに聞こえますか。

非常に

少し

全然

( 13 ) 冷やかな笑いに聞こえますか。

非常に

少し

全然

( 14 ) にか笑いに聞こえますか。

非常に

少し

全然

( 15 ) 不敵な笑いに聞こえますか。

非常に

少し

全然

TAB. 1. 笑い声の聞きとり実験に使用した質問紙 (日本人用)

聞こえない)で評価させるものである。(4)以下の設問に対する回答から、各音声サンプルが12の尺度上での位置を占めるかを知り、多次元の意味空間に位置づけて相互の類似度を数量化することができる。

尺度として選んだ12のラベルとは、「楽しそうな笑い」、「滑稽なことを見たり聞いたりした時の笑い」、「誰かをバカにした笑い」、「あいそ笑い」、「勝ち誇った笑い」、「豪快な笑い」、「卑わいな笑い」、「照れかくしの笑い」、「卑屈な笑い」、「冷やかな笑い」、「にか笑い」、「不敵な笑い」である。ただし選定にあたっては、それらのラベルが様々な笑いの動機や、笑い声の様態を表わす表現を網羅的に代表しているかどうかについて十分検討を加えた訳ではなく、ひとつの試行的な選定に過ぎない。

## 2. 2.

聴取実験の結果、17の音声サンプルのうち被験者の8割以上が実際にありそうな笑い声に聞こえると答えたのが12サンプル(そのうちひとつは本来笑い声のつもりでないもの)であった。しかし、どのような笑いであるかについて発音者の意図と被験者の反応がだいたい一致したのは、わずか3例のみ(「楽しそうな笑い」ないし「滑稽な笑い」が2例、「バカにした」ないし「冷やかな笑い」が1例)、それに準ずるものを含めても5~6例であった。

この結果は、ひとつには笑いの表現方法や聞きとりかたに対する個人差の存在で説明できる。たとえば、発音者本人は笑っているつもりで、被験者のうち何人かもそう思うが、残りの被験者にはその人が本当に笑っているように聞こえない場合であり、あるいは発音者本人は楽しくて笑ったつもりで、自分自身で後で聞きかえしてみてもそのとおりであるのに、聞いている被験者は皆、誰かをバカにして笑っているとしか感じない場合である。個人差のあらわれ方は音声サンプルにより様々であり、個人差が少なく被験者間でほぼ共通の理解がなされる笑い声もあれば、理解のしかたにバラツキの大きい笑い声もあることがわかった。このように笑いの「内容」とその「表現方法」の対応は、それほど明確にコード化されていないことがわかる。

しかし上の結果は、表現方法の個人差に帰すだけでなく、実験に用いた音声サンプルの中に、多義的な、もしくはあいまいな笑い声が含まれていた可能性も考慮して解釈すべきである。また郡(1985)は、音声で笑いの「意味」を識別できるだろうという想定を研究の出発点としているけれども、笑いというものは横隔膜のけいれんが全身に影響をおよぼす全身的な行為であるから(注1)、笑いの種類によっては(あるいはことによるとどのような笑いでも)、音声ではなく顔面表情や身体動作を主な手がかりとして識別する場合があるだろうということが十分想像できる。したがって、この実験結果の解釈にあたってもこのことを考慮する必要があるだろう。音声、顔面表情、身体動作が笑いの知覚に果す役割を評価する必要がある。なおこの実験はコンテクストを与えないでどのような笑い声を判断させたものであり、コンテクストの効果は検討していない。

## 2. 3.

郡(1985)で行った笑い声の音響分析では、上述の17の音声サンプルのF0, F1, F2、セグメント長、振幅、その他の特徴をF0・インテンシティ分析装置およびスペクトログ

ラフで測定・観察した。そして聴取実験の結果と、母音部の持続時間、およびそれらのサンプル内変化、スペクトログラムに見られるその他の特徴とを、聴取実験で被験者の反応がよく一致した音声サンプルを中心に対比した。その結果、笑い声のタイプを明らかに特徴づけるような単一の音響パラメータは見いだせなかった。高いF0, F1, F2値が「人をバカにした笑い」と関連がありそうだという示唆を得たにとどまる。おそらく複数のパラメータが複合して動いているものと想像される。現在、合成音声を用いて音響特性と笑いの意味の対応関係をさらに調査中である。

なお、分析対象とした笑い声サンプルには「ハ」の繰り返しの前に、「ア」の口がまえのまま発せられた強い呼気が、「ハ」の部分の[h]よりもずっと強い雑音として現われ、続いてやはり「ア」の口がまえのまま非常に高い周波数の振動(600~800Hz)とその倍音が100~300msec程度の間、[h]状の雑音を伴って現われる例が多くあった。高い基本周波数部だけが現われ、これに先だつ強い呼気部がない場合もあった。高い基本周波数部のスペクトログラム形状は複雑で、別方向に変化する複数の振動が観察される場合もあり、発音様式は相当複雑なものと想像される。そこだけを取り出して聞くと、ちょっと悲鳴のように聞こえる。この部分の発生様式を探るために Fabre式エレクトログロトグラムを採取したが、その結果、笑い声に見られる高基本周波数部の振動は声帯の振動ではないと考えられた。これはあたかも唇と呼気流で口笛が発生するように、笑う際に喉頭部が狭められ、そこを強い呼気流が通ることによって口笛のような音が発生するのではないと思われる。

一方、「ハ」の繰り返し部は、音声としての「ハ」の繰り返しよりも、「ア」の口がまえのまま発せられる摩擦音[h]と声帯振動(母音部)が、時にオーバーラップしながら交互に漸強漸弱を繰り返す形となっている。

### 3. 笑い声の文化差

#### 3. 1.

「笑い」としてしばしば哲学的あるいは心理学的考察の対象となるものは、主に「楽しい時の笑い」、または「滑稽なことを見たり聞いたりした時の笑い」である。

しかし、コミュニケーションの相手との社会心理的關係を調節しようとする際にも笑いは現われる。いずれの場合でも、何を笑いの対象とするか、あるいはどんな目的で、どのような場面で笑うかは、個人のパーソナリティや年齢、性別、その時の心理状態でも異なるし、文化によっても差があることが経験的に知られている。

以前よく言われたジャパニーズスマイルは西洋人にとって不可解な、つまり微笑しているように思われるけれど、なぜ、何を笑っているのかわからない日本人の表情のことである。これは、微笑を使って対人関係を調整したいという意図が伝わらない、笑いの機能の文化差の例である。「スマイル」でなく、はっきりと笑い声として表出する場合でも、「なぜおまえは笑うのか」といぶかしげに問われる経験は、筆者ならずとも西洋人と親しいつきあひのある人なら誰にでもあるのではないだろうか。

多くの人が笑いの文化差を語っている。しかしその多くは、何を滑稽と思うかに文化差があるという話である。これに対し、ユーモアのセンス差はむしろ個人のパーソナリティ

に基づく部分が大きく、文化差もあるがそれは誇張されてはならないという意見もある(松山・浜、ibid.)。優越の笑いとう微笑の文化差については、しぐさの論考として有名な多田(1972)が扱っている。どのような場面で笑えるかという場面差もある。ヨーロッパ人はあまり笑わないという説があるが、笑いの量の文化差も興味深いテーマである。社会心理的關係を調節する笑いの具体的な文化差については野村(1984)の論考がある。

#### 3. 2.

しかし、野村も示唆しているように、「笑いかた」の文化差があまり論じられる例はないようだ。けれどもコミュニケーションとして笑いを考える立場からは、これは重要な視点である。イギリスで女性どうしが、豪快としか形容のしかたがないような高らかな笑い声を発して笑っているのを何度か観察したことがある。日本人の女性なら決してあのような笑い方をしないだろうと思われた。

イギリスで観察した例ほどではないが、イタリア人のふだんの笑いかたにも豪快さを感じる。こちらが何か笑い話をして、相手があまり高らかに笑い続けるので、日本人としてはそこに虚偽性を感じるのか、その笑い話をした自分自身がしらけてしまうとか、おかしくて笑っているとわかっていても、その笑いに圧倒され、ついには自分自身が笑われているような気にさえなってしまう経験もある。もちろん、おかしくてもいつもいつも高笑いするわけではないことは付け加えておかなければならない。

社会心理的關係を調節するための笑いではどうだろうか。イタリア人が日本人のように「ヘラヘラ」と笑うのを見たことがない。ただそれは、実はイタリア人もそういう笑いかたをするのだが、現われる場面が少ないために見逃しているだけかもしれない。目の前で電車の扉が閉って乗り遅れてしまった。その時に照れかくしの笑いをするのは日本人の特徴のように言われるが、実はイタリア人も笑うことがあるという。しかし、どのような笑いかたをするのであろうか。

#### 3. 3.

以上のように、笑い声に関わる文化差として、(1) 笑いの対象、動機、表出場面、量、機能の差と、(2) 笑いかたの差、言いかえると表現法の違いが考えられる。次節では(2)の「笑いかた」の文化差が音声にどのように現われるかの一端を、聴取実験を通じて検討し、コミュニケーションとしての笑いの社会心理的側面を考察しようと思う。

比較の対象としたのは日本とイタリアで、日本人の笑い声をどのように聞きとるかの差を検討する。具体的には、本稿の2. 1. で記述したような日本人対象の笑い声評価実験を、同じ材料と翻訳した質問紙を使ってイタリア人被験者に実施し、その結果と前回の日本人被験者の結果を対照する。

ここで日本人とイタリア人を比較の対象としたのは、筆者がイタリアの事情を少し知っており被験者を得やすいということにもよるが、表情や音声、身体動作を使つての感情表現が豊かで大きいことで知られるイタリアと、感情表現が社会的に抑制される日本の間で「笑いかた」を比べることが、コミュニケーションとしての笑いの社会心理的側面を知る上できわめて興味深いと考えたからである。日本とイタリアを比べた場合、音声や表情による感情表現のしかたには、共通性もあるが差異も認められる(注2)。しかしその差異

がいかなる音響的特徴や、いかなる表情の差に基づくかはほとんど知られていない。このあたりの事情は日本とイタリアの比較に限らず、多くの異文化比較研究でも同じである。

笑い声でも同様に、文化を越えた共通点とともに、文化ごとの特徴があることが推察できる。楽しいから笑う、滑稽だから笑うという情緒的側面の強い笑いでは、喜び、怒り、悲しみのような基本的な感情の表出(注3)と同じく、笑いかたの文化的普遍性が大きいと想像される。一方、あざけり笑いのような対人関係に関わる社会性の強い笑いでは、笑いかたの文化差はずっと大きいのではないかと想像される。4. 1. 以下ではこの点を中心に考察をすすめる。

### 3. 4.

ところで、日本の笑い声と他文化の笑い声を比較する上で注意しなければならない点がありつつある。それは、日本では笑い声を表わすのに、コード化された多様な言語表現を使うということである。

マンガ誌や劇画誌を開けば、実に多様な笑い声の擬音語的表現ないしは擬態語的表現が目飛びこんでくる。「アハハ」、「ウハハ」、「ウヒヒ」、「フッフッフ」、「ヘッヘッ」、「オホホホ」などは古典的な例であり、ステレオタイプとして登場人物の性別やキャラクターによって使い分けられている。しかしはたしてそれらが現実の笑い声をどのぐらい反映しているだろうか。現実の笑い声は、「ハ」音かそのバリエーションにもとづくものが普通である。「ヒ」や「ホ」を使ったものに特別な意味があたえられるのは、音象徴の問題であろう。

今あげた古典的な表現の他にも、「グッシッシ」、「ムッフッフ」、「キャハハ」、「ケッケッケ」のように新しい表現がどんどん割り出されてゆく。なかには流行語のように華々しく使われ、そして消えてゆく表現も見られる。日本語以外の擬声語を多用する言語ではどうであろうか。

一方、西洋語と呼ばれるような言語では、このように言語化された笑い声表現はきわめて少ないようである。イタリア語では、笑い声を文字で示す時でも“ah”、“ha”、“hi”ぐらいがせいぜいである。このような笑い声の「言語化」の差も文化による差と言えよう。これは言語としての擬声語の豊富さや貧困さの違いに原因を帰することもできるかもしれないが、それではあの多様性は説明しがたいように思われる。そうではなく、これを笑い声も含めて音一般に対する感受性の差の表われと見ることもできる。日本人は西洋人より多くの笑い声のニュアンスを区別しているのかもしれない。この問題は、音象徴の問題と関連させて検討されるべきである。

笑い声の言語化に関連してもうひとつ指摘すべきことがある。日本ではかなりのバリエーションはあっても、およそ日本語の母音の範囲内で笑う。母音音価のバリエーションは自然にこみあげる笑い声ほど大きく、「ハ」とも「ヘ」とも「ホ」ともつかないことが多い。笑いをおさえようと口を閉じる努力する場合には、なおさらその音価はあいまいになる。一方、意図的な笑いは言語音に近いようである。もし「フッフ」や「ウ」や「ウ」や「ウ」と笑う場合があっても、その母音は日本語としての「ウ」と同じく非円唇であって、円唇の[u]にはならないと思う。まして円唇前舌の[y]で笑うことはない。ところが言語音として[y]音が存在するフランスでは[h<sub>y</sub>h<sub>y</sub>h<sub>y</sub>]と笑うことがあるという。これらの例は笑い声

の言語的性格を物語っていると言えよう。もっとも、フランス語もイタリア語も言語音として[h]を持たないが、笑う時には[h]がふつうに現われる。これは笑い声の生理現象としての性格に由来する。

### 3. 5. 実験により検討すべき仮説

これまで見てきたように、笑い声の文化差について検討すべき項目は多くある。本稿ではそのごく一面を考察するに過ぎないが、日本人の笑い声を日本人とイタリア人に聞かせて、それがどんな笑い声かと問うた場合、両者がいかなる差を示すだろうかという点を検討し、それを通じて両者の笑いかたの差をさぐる。その際、3. 3. でも述べたような、情緒的性格の強い笑い声は日本とイタリアで共通性が大きく、対人関係に関わる社会的側面の強い笑い声では差があるだろうという想定を仮説とし、この点の検討を中心に作業をすすめる。

## 4. 日本人の笑い声の聞きとりかたに見る日本人とイタリア人の差

### 4. 1. 聴取実験の方法

郡(1985)で分析した、30才代前半の日本人男性一名の笑い声のサンプル17種を材料として、同論文で日本人被験者10名を対象に行なった聴取実験と同様の実験を12名のイタリア人被験者に実施した。

17のサンプルのうちNo. 7のみは「ハハハハハ」と単に音読しただけのもので、笑いの意図はない。他の16種も「ハ」音を使って笑ったもので、「ハ」の繰り返し回数は1~7回である(Tab. 2)。2. 3. に述べたように、「ハ」の繰り返しの前に、強い呼気雑音や、高い基本周波数を持つ音が入っているサンプルがある。Tab. 2にはそれらの有無もまとめた。スペクトログラム、音響特性は郡(1985)を参照されたい。

イタリア人を対象とした実験の方法も日本人の場合と同様である。日本人の場合と同じ

|             | サ ン プ ル 番 号 |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |
|-------------|-------------|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|
|             | 1           | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| 「ハ」の回数      | 6           | 4 | 7 | 4 | 5 | 3 | 5 | 4 | 1 | 4  | 6  | 5  | 4  | 3  | 4  | 4  | 5  |
| 最初の強い呼気部の有無 | 有           | 有 |   | 有 |   | 有 |   |   | 有 |    |    |    |    |    |    |    | 有  |
| 高い基本周波数部の有無 | 有           |   |   | 有 |   | 有 |   |   | 有 | 有  | 有  |    | 有  |    |    | 有  | 有  |

TAB. 2. 笑い声の聞きとり実験に使用した、17種の日本人の笑い声の音響的特徴

\*\*\*\*\* Numero del nastro ( ) \*\*\*\*\*

(1) L'emissione che stai ascoltando esprime una risata?  
 si no

\* Nel caso di "si" rispondi alle domande che seguono, altrimenti passi ad un altro nastro.

(2) descrivi i tipi di risata e la tua impressione.

(3) E' una risata spontanea o forzata?  
 spontanea forzata

(4) E' una risata allegra?  
 molto un po' non  
 allegra allegra allegra

(5) E' una risata per una situazione comica o un fatto comico?  
 molto un po' no

(6) E' una risata sardonica?  
 molto un po' no

(7) E' una risata accattivante?  
 molto un po' no

(8) E' una risata trionfante?  
 molto un po' no

(9) E' una risata dominante?  
 molto un po' no

(10) E' una risata oscena?  
 molto un po' no

(11) E' una risata per nascondere l'imbarazzo?  
 molto un po' no

(12) E' una risata sottomessa?  
 molto un po' no

(13) E' una risata distaccata?  
 molto un po' no

(14) E' una risata amara?  
 molto un po' no

(15) E' una risata sfacciata?  
 molto un po' no

(16) E' una risata sarcastica?  
 molto un po' no

(17) E' una risata affabile?  
 molto un po' no

(18) E' una risata per commiserazione?  
 molto un po' no

T A B . 3 . 笑い声の聞きとり実験に使用した質問紙(イタリア人用)

17本のカセットテープを使用し、イタリア語に翻訳された質問紙(T a b. 3)の設問に、日本人と同じ手続きで答えてもらった。ラベルの翻訳にあたっては、日本語の表現に対応し、かつイタリア語で笑いを表現するときにふつうに使われるか、あるいは使えそうな表現を選び、直訳は避けるように心がけた。しかしそのために訳語が原義からずれる場合と、適当な表現が見つからずに直訳となり、イタリア語で笑いを表現するのに一般的でない場合がでてきた。

前者にあたるのは、「あいそ笑い」、「卑わいな笑い」、「照れかくしの笑い」に対する表現である。「あいそ笑い」に対する表現としては risata affabile と risata accattivante を考えたが、前者はいんぎんな心からの笑いであり、後者には自らを低めてとか、自らの意志に反してというニュアンスはないらしい。実験にあたっては両者をもとに採用した。「卑わいな笑い」に対する risata oscena については、oscena は「卑わいな」という意を持つが、笑いについていうときは不快の情を催すような笑いということになるようだ。「照れかくしの笑い」に対する risata per nascondere l'imbarazzo は、文字どおりには「困惑を隠すための笑い」ということである。

一方、「豪快な笑い」に対して選んだ risata dominante (支配する笑い)、「卑屈な笑い」に対する risata sottomessa (服従の笑い)の両者はイタリア語で笑いを表わす表現として普通ではないらしい。意味のずれのある場合を含め、こうした語については、さらに検討を加えることによって、より適切な訳語を見つけることができるかもしれないが、これは今後の課題としたい。

本稿では、ラベルの翻訳のまずさに帰因する結果の解釈の誤ちをできるだけ避けるために、日本語の表現とイタリア語への翻訳との間に意味の差の少ないラベルについてのみ考察をすすめる。すなわち、「楽しそうな笑い」、「滑稽なことを見たり聞いたりしたときの笑い」、「誰かをバカにした笑い」、「勝ち誇った笑い」、「冷やかな笑い」、「にが笑い」、「不敵な笑い」の7種である。ただしこの場合でも何を滑稽と感じるかといった差は依然存在している。以上のうち、「楽しそうな笑い」と「滑稽な笑い」は情緒的性格が強く、「バカにした笑い」、「勝ち誇った笑い」、「冷やかな笑い」、「不敵な笑い」は対人関係に関わるもので、社会性が強いと考えられる。

なお、実験ではイタリア人用の設問としてこの他に risata sarcastica (皮肉な笑い) と risata per commiserazione (憐れみの笑い) というラベルを加えた。この2つ以外は、郡(1985)の日本人被験者に対する実験の結果と、イタリア人に同じ実験をしたときの反応を比較するための作業ということで、日本語のラベルを翻訳したものを使った。したがってイタリア語で笑いを表現する際によく使うラベルで、対応する日本語の表現のしかたがないためにここからもれているラベルがある。

被験者は男1、女11の合計12人で、年齢は20代から40代である。実験はイタリアのC. N. R. 音声研究センター(Padova)で行った。

#### 4. 2. 聴取実験の結果

ここでは、3. 5. に述べた仮説を、日本語とイタリア語の意味差が少ない7種のラベルに対して、各音声がどのような適合度評価を見せるかを検討し、それに関連する若干の問題を考察する。自由記述の考察は別の機会にゆずる。

4. 2. 1. 仮設の検討とラベルの類似度

仮設にしたがえば、情緒性性格の強い「楽しそうな笑い」と「滑稽なことを見たり聞いたりした時の笑い」の笑いかたは日本人とイタリア人の差が少なく、社会的性格の強い「誰かをバカにした笑い」、「勝ち誇った笑い」、「冷やかな笑い」、「不敵な笑い」の笑いかたは日本人とイタリア人の差が大きい。笑いかたが似ていれば、ある笑い声を聞いてそれが楽しそうか否か、滑稽な笑いか否かなどという判断も似ているはずである。逆に同じ内容の笑いでも、笑いかたが日本とイタリアで異なれば、同じ笑い声を聞いても判断のしかたは異なるはずである。したがって、ここで行なった実験では、17種の音声サンプルの各々に対する7種のラベル上の適合度評価のうち、「楽しそうな」と「滑稽な」のふたつのラベルでは日本人とイタリア人の評価の一致度が高く、「バカにした」、「勝ち誇った」、「冷やかな」、「不敵な」では両者の評価の一致度が低いはずである。Tab. 4は、日本・イタリア間で比較可能な7種のラベルに対する日本人（各欄の斜線左側）とイタリア人（右側）の評価結果を各々の音声サンプルごとにまとめたものである。ここでは、ある音声があるラベルに対して「非常にそれらしく聞こえる」という評価に1点、「少しそれらしく聞こえる」には0.5点、「全然それらしく聞こえない」に0点を与えて被験者全員の点数を合計し、それを被験者数で割った値をパーセント表示してある。言いかえると、ある音声サンプルがあるラベルに対してどの程度適合しているかを100点満点で表わしたものである。ただし、質問紙の最初の設問で「実際にありそうな笑い声」に聞こえないと回答した被験者は、それ以後すべての設問に答えないから、仮にそういう被験者がひとりでもいれば、残りの被験者が全員「非常にそれらしく聞こえる」と回答したとしても、この表の数値は100にならない。

Tab. 4の最下欄は、17の音声サンプルの評価を通じて日本人とイタリア人が示した反応の相関関係と、その有意水準 ( $r = 0$ ) を各ラベルごとに示したものである。「楽しそうな笑い」と「滑稽な笑い」では日本人とイタリア人の反応の相関が高く、両文化で似たような笑いかたをすることが推測できる。一方、「バカにした笑い」、「勝ち誇った笑い」、「冷やかな笑い」、「不敵な笑い」では日本人とイタリア人の反応の相関は低く、両文化で異なる笑いかたをすることが推測できる。したがって仮設は立証されたことになる。

Tab. 4に見られる日本人とイタリア人の各ラベルに対する反応パターンを、「クロス集計表の数量化」(柳井・高根(1977))の手法で視覚化したのがFig. 1である。ここには反応パターンの類似度が空間的な距離で表わされている。「楽しい笑い」と「滑稽な笑い」は、日本人イタリア人ともどもひとつのクラスをなしており、4つの反応パターンは互いに似ていることがわかる。したがって日本人にとってもイタリア人にとっても、楽しい時も滑稽な時も笑い声は似たものであることが推測できる。一方、日本人の「バカにした笑い」と「冷やかな笑い」の反応パターンは似ており ( $r = .84, p < .001$ )、「勝ち誇った笑い」と「不敵な笑い」も似ている ( $r = .84, p < .001$ )。そしてこれに「にが笑い」を加えた5つの笑い声ラベルに対する日本人の反応パターンが、Fig. 1上でひとつのまとまりを作っている。イタリア人の場合も「バカ」と「冷やか」( $r = .69, p < .01$ )、および「勝ち誇った」と「不敵な」( $r = .76, p < .001$ ) どうしは似ており、これに「にが笑い」を含めた5つのパターンも全体でひとつまとまりをなしているとする

| ラベル  | 楽しい              | 滑稽               | バカ    | 勝ち誇った | 冷やか   | にが    | 不敵    |
|------|------------------|------------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| (1)  | 35/46            | 35/46            | 20/8  | 10/13 | 10/8  | 10/21 | 20/8  |
| (2)  | 30/33            | 45/29            | 35/8  | 5/4   | 20/8  | 25/17 | 20/4  |
| (3)  | 10/38            | 15/29            | 30/38 | 40/33 | 20/29 | 5/21  | 45/46 |
| (4)  | 25/25            | 30/25            | 30/21 | 10/17 | 25/38 | 10/4  | 20/8  |
| (5)  | 0/17             | 0/13             | 10/25 | 0/4   | 10/58 | 5/13  | 0/8   |
| (6)  | 75/63            | 60/58            | 20/13 | 10/13 | 15/8  | 15/4  | 15/13 |
| (7)  | 0/0              | 0/4              | 0/38  | 0/33  | 10/63 | 0/17  | 0/33  |
| (8)  | 20/21            | 25/13            | 75/38 | 25/29 | 60/38 | 0/17  | 55/29 |
| (9)  | 0/4              | 5/4              | 70/17 | 10/13 | 65/38 | 25/21 | 35/4  |
| (10) | 35/33            | 45/21            | 50/38 | 35/29 | 55/58 | 10/13 | 50/8  |
| (11) | 15/50            | 35/42            | 50/17 | 50/21 | 35/8  | 5/25  | 50/21 |
| (12) | 10/33            | 5/29             | 45/13 | 20/13 | 40/33 | 45/17 | 25/4  |
| (13) | 25/50            | 40/33            | 55/17 | 20/58 | 20/21 | 5/8   | 30/33 |
| (14) | 15/21            | 20/21            | 20/42 | 10/21 | 25/33 | 35/8  | 5/13  |
| (15) | 40/58            | 50/54            | 35/8  | 5/17  | 25/25 | 25/4  | 20/17 |
| (16) | 80/83            | 85/75            | 15/4  | 20/13 | 5/4   | 10/8  | 25/13 |
| (17) | 15/8             | 10/8             | 15/29 | 10/13 | 30/63 | 5/25  | 20/13 |
| r =  | 0.83<br>p < .001 | 0.86<br>p < .001 | -0.01 | 0.38  | 0.29  | -0.15 | 0.28  |

TAB. 4. 日本人とイタリア人の被験者による、17種の日本人の笑い声の聞きとり実験7種の笑い声のラベルに対する適合度評価(%) (各種斜線左:日本人、右:イタリア人)

| ラベル  | 楽しい     | 滑稽               | バカ      | 勝ち誇った            | 冷やか     | にが               | 不敵      |
|------|---------|------------------|---------|------------------|---------|------------------|---------|
| (1)  | 60/100  | 50/92            | 60/100  | 50/92            | 60/100  | 50/92            | 60/100  |
| (2)  | 100/92  | 70/75            | 100/92  | 70/75            | 100/92  | 70/75            | 100/92  |
| (3)  | 50/92   | 20/42            | 50/92   | 20/42            | 50/92   | 20/42            | 50/92   |
| (4)  | 100/92  | 40/33            | 100/92  | 40/33            | 100/92  | 40/33            | 100/92  |
| (5)  | 20/92   | 0/17             | 20/92   | 0/17             | 20/92   | 0/17             | 20/92   |
| (6)  | 100/100 | 100/83           | 100/100 | 100/83           | 100/100 | 100/83           | 100/100 |
| (7)  | 10/92   | 0/17             | 10/92   | 0/17             | 10/92   | 0/17             | 10/92   |
| (8)  | 100/100 | 30/50            | 100/100 | 30/50            | 100/100 | 30/50            | 100/100 |
| (9)  | 80/75   | 20/25            | 80/75   | 20/25            | 80/75   | 20/25            | 80/75   |
| (10) | 90/100  | 70/50            | 90/100  | 70/50            | 90/100  | 70/50            | 90/100  |
| (11) | 80/100  | 30/75            | 80/100  | 30/75            | 80/100  | 30/75            | 80/100  |
| (12) | 80/92   | 30/42            | 80/92   | 30/42            | 80/92   | 30/42            | 80/92   |
| (13) | 90/100  | 50/58            | 90/100  | 50/58            | 90/100  | 50/58            | 90/100  |
| (14) | 80/92   | 20/42            | 80/92   | 20/42            | 80/92   | 20/42            | 80/92   |
| (15) | 100/100 | 50/92            | 100/100 | 50/92            | 100/100 | 50/92            | 100/100 |
| (16) | 100/100 | 100/92           | 100/100 | 100/92           | 100/100 | 100/92           | 100/100 |
| (17) | 50/83   | 10/17            | 50/83   | 10/17            | 50/83   | 10/17            | 50/83   |
| r =  | 0.33    | 0.78<br>p < .001 | 0.33    | 0.78<br>p < .001 | 0.33    | 0.78<br>p < .001 | 0.33    |

TAB. 5. 「笑い声」かどうか、および「自然な笑い」かそれとも「作った笑い」かの評価(%) (各種斜線左:日本人、右:イタリア人)

ことができる。これら5つのラベルに対するパターンは、このように両文化内でともにまとまりを見せているが、両文化間ではそれらは対立している。すなわち、情緒性の強い笑いかたは日本人とイタリア人の差が小さく、社会性の強い笑いの笑いかたは差が大きいという仮設の正しさは、この図からも読みとることができる。

このように、「楽しそうな笑い」と「滑稽な笑い」、「バカにした笑い」と「冷やかな笑い」、そして「勝ち誇った笑い」と「不敵な笑い」どうしは、日本でもイタリアでも笑いかたが似ていると考えられる。ただし、後の2組については日本とイタリアの差が大きい。「にが笑い」も日本とイタリアの差があるようである。

#### 4. 2. 2. 実際にありそうな笑い声か、自然にこみあげた笑い声か

Tab. 5は実際にありそうな笑い声に聞こえるかどうか、および、自然にこみあげた笑い声に聞こえるか、というふたつの設問に対する反応をまとめたものである。数値は、「実際にありそう」、および「自然な笑い」に聞いた被験者数のパーセント表示である。

実際にありそうな笑い声かどうかについて、すでに日本人とイタリア人の評価は異なっている。イタリア人はいずれの音声サンプルに対しても評価が高い。サンプル No. 5と7は日本人ではそれぞれ20%、10%ときわめて低い評価であるのに、イタリア人の評価は92%と高い。特に No. 7は本来、対照のために単に「ハハハハハ」と笑いの意図なしに音読したものである。これは、笑い声には[h]音が現われるにもかかわらず、言語音としての[h]がイタリア語にないために、[h]を含む疑似笑い声や不完全な笑い声をも笑い声と聞いたのであろう。

自然にこみあげた笑いか、それとも作った笑いかの評価については、日本人とイタリア人の判断は似ている。この点に関しては、「楽しそうな笑い」そして「滑稽な笑い」と同様、文化的共通性が大きいようである。

#### 謝辞

聴取実験遂行に御協力いただいたC.N.R. 音声研究センターの E. Magno-Caldognetto さん、K. Vaggiesさん、F. Ferrero 氏、および実験の被験者として協力していただいた日本人とイタリア人の方々に感謝いたします。

#### 注

- (1) ダーウィンは人間と動物の感情表現に関する有名な論考(1872)のなかで、すでに生理現象としての笑いを研究している。
- (2) 音声についてはMagno-Caldognetto et al. (1983)、表情・身体動作についてはShimoda et al. (1978)がある。
- (3) Ekman らは顔面表情から感情を知覚する際の文化的普遍性を主張している。たとえば Ekman et al. (1971)。

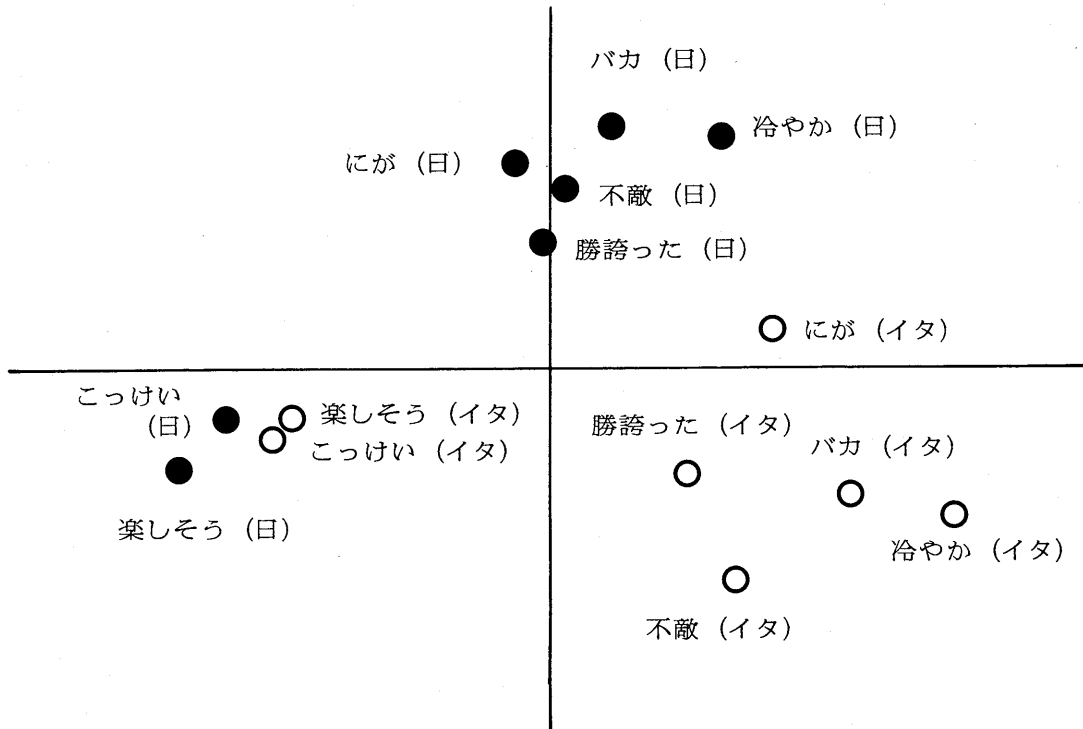


FIG. 1. 日本人とイタリア人の回答パターンの違いの数量化

## 文献

- 郡 史郎 (1985) : 笑い声の音響的性質、「視聴覚外国語研究」、第8号、21-48、大阪外国語大学。
- 多田道太郎 (1972) : 「しぐさの日本文化」、筑摩書房。
- 野村雅一 (1984) : 「ボディランゲージを読む、—身ぶり空間の文化」、平凡社。
- 松山義則・浜治世 (1974) : 「感情心理学」、1、理論と臨床、誠信書房。
- 柳井晴夫・高根芳雄 (1977) : 「多変量解析法」、朝倉書店。
- Darwin, C. (1872) : The expression of the Emotions in Man and Animals, Murray London.
- Ekman, P. and Friesen, W. (1971) : Constants across cultures in the face and emotion, Journal of Personality and Social Psychology, 17(2), 124-129.
- Magno-Caldognetto, E. and Kori, S. (1983) : Intercultural Judgment of Emotions Expressed Through Voice : the Italians and the Japanese, Quaderno del Centro di Studio per le Ricerche di Fonetica, 339-363, Progetto, Padova.
- Shimoda, K., Argyle, M. and Ricci Bitti, P. (1978) : The intercultural recognition of emotional expressions by three native racial groups : English, Italian and Japanese, European Journal of Social Psychology, 8, 169-179.

笑い声の聞きとりにおける文化差  
日本人とイタリア人の場合

郡 史 郎  
大阪外国語大学